

## I C T 授業活用教育実践

対 象	特別支援【施設内教育学級】
教科・科目	生活単元学習
単 元	くじらぐも（朗読劇）
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実態が大きく異なる2名が、お互いの存在を意識し、共同で一つの活動を行う。</li> <li>・入院による制約や、実体験の不足を、I C Tを活用することで補い、体験的な学習を行う。</li> </ul>
I C T環境 (授業で使用した機器)	Windows パソコン、プロジェクタ、ワイヤレスマウス、AppleTV、ディスプレイ
利用したデジタル教材 (アプリ、サイトのアドレス、資料など)	<p>プレゼンテーションソフト (PowerPoint) で作成したファイル</p> <p>効果音ファイル (チャイムの音、ふえの音)</p> <p>音楽ファイル (くじらのとけい、やさしさに包まれたなら、ふしぎなポケット)</p>
授業での I C T 機器の活用 方法と手順	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 教科書の題材である「くじらぐも」(光村図書)を活用する。</li> <li>② プレゼンテーションソフトを用い、電子絵本を作成する。挿絵を、あらすじに合わせて、アニメーション機能を使い変化させる。</li> <li>③ 児童1がクリックすると、場面が切り替わる。挿絵が動いたり、チャイムが鳴ったり、音楽が鳴ったりする。</li> <li>④ 児童2が、スクリーン上の「くじらぐも」を朗読する。</li> <li>⑤ 「天までとどけ、一、二、三」のかけ声は、教員を含めた全員で行う。</li> <li>⑥ クジラは画像と模型を併用しクジラに乗る感覚がもてるようにする。</li> </ol>
授業の工夫 (ポイント)	<p>障害の実態が大きく異なる児童二名が、それぞれのできることを生かし、共同で「くじらぐも」の朗読劇を行う。児童1は、ゆっくりとした追視と、教師と一緒に、ワイヤレスマウスをクリックして場面を変えることや、映像を追視することができる。児童2が気持ちを込めて朗読し、児童1がプロジェクタの場面転換をする。児童1と児童2が、場面転換、朗読、歌などの共同学習を行い、場面を一緒に共感できるようにする。映像と実物大の模型を併用し、大きさや質感等、心から実感できる場面を作りたい。</p>
児童の様子	<p>事前学習では、読み聞かせを行い、児童1は、教師の方を見つめ、よく聞いていた。舞台練習ではクジラの映像と実物大の模型を、対象物に視線を動かし注視していた。児童2は、長期欠席中に何度か朗読を行い、おおむね読むことができている。事前学習では、児童2は、プロジェクタで大きく投影したクジラを見たが、クジラの大きさについて、実感がわからない様子であった。しかし、模型のクジラに初めて会った時には、口に触れた後、尾まで歩いていき「大きいね」と実感することができた。</p>

## 実践例

配当時間		学習の進め方	指導のポイント
導入	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶</li> <li>合奏「カントリーロード」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>姿勢をよくして、大きな声で挨拶をする。</li> <li>合奏は、児童1は打楽器（電子楽器）、児童2は歌を担当する。学習への意欲を高める。</li> </ul>
展開1	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>「くじらぐも」の模型に自分の写真を貼る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>模型に児童や教師の写真を貼り、自分たちがクジラに乗っている状態を見ることでイメージをさらに深める。</li> </ul>
展開2	15分	<ul style="list-style-type: none"> <li>朗読劇「くじらぐも」</li> <li>序盤（校庭でたいそう）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童2が子ども役、教師がそれ以外の、主にナレーションを担当する。遠くにいるくじらに話しかけることを意識する。</li> <li>「天までとどけー、二、三」で空へ飛ぶことを意識し、かけ声に合わせ、身振りを付ける。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>場面転換（クジラの模型登場）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全員で「くじらのとけい」を歌う。</li> <li>プロジェクタの画像から実物中心に場面転換を行う。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>中盤（くじらぐもの上）</li> <li>終盤（校庭に帰ってくる）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際に実物大のくじらに乗り、物語の世界を体験する。</li> <li>話し方を工夫する。児童2が、全文を朗読する。児童1が画面を変更したことを確認してから読み始める。</li> </ul>
まとめ	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>感想</li> <li>あいさつ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習で楽しかったことを発表する。</li> <li>教師がよかった点を伝える。</li> <li>学習発表会本番に向けて意識を高める。</li> </ul>

## 評価

児童について	児童の興味・関心	児童1は、くじらぐもの絵、プロジェクタの投影画、大型模型をそれぞれよく見ていた。児童2は、発表会の練習を毎回楽しみにしていた。
	児童の理解	児童1は、朗読、歌、クジラに繰り返し触れ、集中した表情であった。児童2は、クジラの大きさや、空に浮かんでいることを、想像できた。
	児童の情報機器の活用度	児童1が、画面を「見る」活動を活かし、児童2と一緒に朗読劇を楽しむために、教材の提示、場面転換で情報機器を活用した。
授業について	事前準備の難易度	大きな雲のクジラを伝えるため、4メートル近いクジラの模型とプロジェクタ画像のつながり、まぶしさ等、配慮が必要な点があった。
	指導者にとっての授業展開の難易度	実態が大きく異なる児童それぞれが、お互いにできることを協力して、一緒に学習する場面を、意図的にデザインするところが難しかった。
	授業の「ねらい」の設定は適切であったか	お互いの存在を意識するための活動について、くじらぐもに乗る時に、一緒に手をつないで乗るなど、更に工夫する余地がある。
	効果的な指導方法であったか	児童1については、画面をよく見て、操作できた。児童2については、児童1の操作に合わせ、気持ちをこめて朗読し、クジラの動きをまねたり、登場人物に合わせて声の調子を変えたり工夫する場面が見られた。
<p>&lt;実践の感想及び反省点等&gt;</p> <p>クジラの大きさや、くものくじらとは、どのようなものか、空へ飛ぶ場面をどのように伝えるか等、学習しながら改良を加える状況であった。児童2からは、「みんなでくじらぐもにのりました。ふわふわなきもちになりました」と、朗読劇が楽しかった感想が聞かれた。クジラの大模型と大画面投影により、二人の児童は、今まで見たことがない大きな模型のクジラを見て、乗って、一緒に活動することができた。</p>		